OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	M. ArnoldのLove Poems : Faded Leavesを中心として
Author(s)	上山, 政義
Citation	大阪外国語大学学報. 1972, 27, p. 99-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80439
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

M. Arnold の Love Poems

—— *Faded Leaves* を中心として

上　山　政　義

The purpose of this essay is to think about the merits and demerits of Matthew Arnold's Love Poems chiefly through *Faded Leaves*, a group of his Love Poems. By way of introduction several expert opinions concerning his thought, literary style, lover, etc. In the main discourse each poem of *Faded Leaves* is examined one by one. The style, matter and phrases of every poem are studied and appreciated. *Faded Leaves* are thought to be Marguerite poems by some specialists. But they should be called Wightman poems. At least one of them cannot be considered as a Marguerite poem. The reason is explained in this essay.

本稿の目的は，Matthew Arnold (1822—88) の詩 *Faded Leaves* を中心として，彼の恋愛詩を鑑賞し，その内容に検討を加えて，その長所と短所を浮彫りにすることが，その主たるものである。しかし，本論に入るに先立って，当時の時代思潮，あるいは彼の詩などに関する諸家の見解を若干紹介しておくことにする。

先づ，土居光知氏は，「アーノルドの詩はテニスン及びブラウニングと比較すると，詩としては量に於いても少なく，力に於いても劣っているように感じられるが，時代の特質を一層よくあらわしている。」[1] と述べておられる。そして，彼の時代の特色と言えば，概略次の如きものとなるであろう。即ち，政治，社会の方面では，選挙法改正法案の議会通過に伴って，政権の中心は世襲的権力を保有していた貴族から中産階級，とくに商工業者へと次第に移行し，民主主義，民衆主義の著しい抬頭を見るに到ったのである。科学の方面では，産業熱が旺盛となり物質文明が急激な発達を遂げ，とりわけ C. Darwin の *The Origin of Species* は劃期的な意義をもつものであった。哲学，思想の方面では，功利主義や実証主義が隆昌を極めていた。文学とくに小説の方面では，初期の頃は当時の世相の描写を主とするものが多かったのであるが，時代の推移につれて，倫理的，科学的人生観や世界観，哲学的思考が具体性を帯びたものとなり，次いで自然主義が勃興し，やがては所謂世紀末文学が生まれて耽美主義が流行し，decadence が一世を風靡する傾向が生じたのである。ただし，Arnold は世紀末文学が全盛となる直前の1888年に世を去っている。さて，斯くの如き時代における Arnold の文学界における活動の基盤を土居光知氏は

次の通り記述しておられる。「アーノルドは貴族主義と平民主義，伝統的信仰と科学的知識，近代主義と古典主義等の対立を周囲にも自己の心の中にも感じ，それを表現したのである。この当時の精神が既に統一的な詩的感激を欠いていたのであった。そしてアーノルドの理智は時代思潮の中流に生きこれを指導せんとしたが，彼の感情は時代から逃れんとする傾向があり，初めから批評的精神と詩的感情とが彼のうちに於いて戦い，かつ督学官の職にあったことが感情の流露をさまたげ，彼の詩をして情熱の力に乏しい冷静なものにしたのである。」[2] と。

次に，斎藤勇氏は，詩人としての Arnold の特徴とその特徴の依って来る所以を次の如く論述しておられる。「Arnold は道念が固く，かつ宗教的情操に富み，stoic 風な忍耐をもって自ら修養に努めた "a seeker after God" であった。宗教上の疑惑のみならず，母国の産業熱に呪われている非文化的情態に心を痛め，かつ彼の詩で Marguerite と呼ばれている婦人に対する失恋もあったので，彼はいつも哀愁を胸中に懐いていた。従って，胸底の思いを述べた彼の詩には哀韻切々たるものが多い。（中略）彼は感情の高調するままに絶叫し咏嘆せずには居られないというよりも，沈思瞑想ののち筆をとったらしい詩人であるが，とにかく深く人を動かすものがある。その特色は古典的な落ち着きある言葉をもって教養人の空虚を歎いたことにある。」[3] と。

ところで，上の引用文の中で斎藤勇氏も触れておられる通り，Arnold は宗教に深い関心を寄せていたのであるが，石田憲次氏は「マシュー・アーノルドの宗教観」という見出しの下に，Arnold の活動における宗教の役割を次の様に述べておられる。「マシュー・アーノルドの功績の一つは，早く近代文化の遠心的傾向を看取して，求心的傾向の必要を唱え，自由解放等の合言葉に対して，抑制，節度等の必要を力説した所に在る。彼は今日のバビット等と共通する所のものを多く持っている。而もバビットの云う二方面，古典主義の立場と宗教（仮にこれをヘブライズムと名づけても大して差支えないであろう。）の立場と，両方から時代の弊を矯めようとしていることは，注意に価する。」[4] と。

さて，Arnold の "Poetry is a criticism of life." という周知の命題に関連して，矢野峰人氏の所説を紹介しておきたい。既ち，「アーノルドは〝人生の批評〟が〝詩〟たるためには，それが詩的美，詩的真の法則に従って為さるべきである事を説くと共に，更にそれらの要求する厳粛性と真摯との具備をば，真に優秀なる詩歌の必要条件として数えたのである。」[5] と。同氏はさらに，詩的真および詩的美について詳しく論じておられるのであるが，先づ詩的真については，「アーノルドが詩的真と呼んだものには，先づ "poetic truth of substance" と "poetic truth of style" との二つがあることを看過してはならない。」[6] と述べ，この所謂 "substance" を構成するものは，元来詩人の "view of things, criticism of life" に外ならないとの考えを明らかにしておられる。一方，詩的美に就いては，「さきに我々は，彼が〝詩的真〟と呼べるものに，内容と格調との二種ある事を見たが，この区別はここにおいても又見られないであろうか。」[7] と問題提起を行った後に，次に示す如き所説を披瀝しておられる。「アーノルドが詩の〝内容美〟を重視していたことは，もはや疑う余地はない。それにもかかわらず，彼は〝詩的真の法則〟に関

して説明する際，恰もこれが唯単に用語格調の方面のみに関するものなるかの如く，〝内容美〟について一言も触るる所が無なかった。[8]（中略）アーノルドとしては，詩的美の法則を論ずるに当り，既に〝詩的真〟について説いた以上，別に〝内容の美〟に関し説明するの必要を感じなかったのではあるまいか。斯くの如く解する時，一見不統一乃至矛盾せるかの観のある彼の〝詩的美〟論は，実は〝真即美〟という彼の根本的観念から発しているので，決して矛盾でも不統一でもないことがわかってくるのである。」[9]と。

以上は，Arnold の詩人および批評家としての profile の一端を示すために若干の識者の論説を紹介したものであるが，彼の Love Poems を論ずるに際して決して無視することができない女性である Marguerite に関して，矢野峰人氏の所見を引用させていただくことにする。同氏は，Arnold と Marguerite との未完に終った恋愛について，その著の第一章「アーノルドの恋」の中で，次の如き解釈を下しておられる。「マーゲリートがアーノルドより去ったのは，マーゲリート一人の罪ではない。その責任の大部分はアーノルドこそ負うべきである。而してこの事実は，流石に聡明なるアーノルドのよく弁えていたところである。何となれば，熱情に支配されつつ生くる女性の求むるが如き男性は——或は男性の中に求むる特性は——"Stern strength and promise of control" であり，"a soul that never sways / with the blind gusts which shake their own" なる事を，彼は知っていたからである。然しながら，マーゲリートが彼より離れて行ったのは，彼が彼女の要求するが如き男性ならざりしためだと解するのは，彼が如何に女性——少なくともマーゲリートの心理を理解し得なかったかを証するものと言えよう。何となれば，マーゲリートがアーノルドを去ったのは，彼の解釈とは正反対に，彼に彼女の一切を許し無我を以てこれを抱擁するが如き熱情と，一切の障碍を打破克服して邁進するが如き勇気とが無く，自ら首鼠両端の態度を持しながら，相手には不変不断の愛を要求するが如き自我主義的な態度に慊らなかったがためではあるまいか。」[10]と。本稿の筆者も同氏と感を同じうするものであり，恋する女性に対するこのような Arnold の態度は当然彼の恋愛詩にも少なくとも幾分かは反映しているはずのものであるが故に，彼の恋愛詩は詩人としてのすべてを超越した火と燃ゆる情熱において読者に未だしの感を与えているものと思われるのである。

さて，米国における Arnold 研究家である Margery W. Stricker 氏は，その著 *Romantic Aspiration in the Poetry of Matthew Arnold* の中で，Arnold の恋愛詩 *Switzerland* 及び *Faded Leaves* についての所見を発表されているが，同氏はその第一章 Romantic Aspiration の冒頭の節において，romantic aspiration と Arnold の詩との関係について次の如く述べている。

> Romantic aspiration both inspires and shapes many of Arnold's poems. Once its principal characteristics become fairly clear, it provides an insight into Arnold's poetic work, revealing the structure of the major poems and often accounting for a poem's success or failure.[11]

即ち，Classicism の信奉者として知られる Arnold には，Classicism と対照的な思潮である

Romanticism の要素をその詩の中に含有しているわけである。詩には浪漫的な要素が必要な場合が極めて多いことは今更言を俟つまでもないであろうし，詩の種類によってはそれが不可欠な場合も少なくない。従って批評家としての Arnold には Classicism の色彩が濃厚であったのであるが，詩人としての Arnold は romantic aspiration を持っていたことは容易に想像されるところであり，実際彼の詩の中には Romanticism が脈々と波打っているものがあることは彼の詩を読んだ人がよく知っておられる通りである。

ところで，Stricker 氏は第一章 Romantic Aspiration を次の一節で結んでおられる。

> It is not surprising, then, that an aesthetic substitute for religious feeling permeates Arnold's poems, in the form of romantic aspiration. Romantic aspiration is most apparent in *Switzerland* and *Faded Leaves*. After observing how this impulse inspirits these poems and determines their structure, we can trace its effects through the span of Arnold's poetic career.(12)

上に引用した一節が示す通り，Arnold の恋愛の詩である *Switzerland* 及び *Faded Leaves* において彼の romantic aspiration がとくに顕著なのであり，これらの詩篇を通じて romantic aspiration がどのように作用しているかを探究することによって，彼の詩人としての生涯において，Romanticism が如何なる役割を果したかを解明する手掛りをつかむことができる筈である。

今から本論に入って，*Faded Leaves* を中心として Arnold の Love poems を検討しようとするのであるが，先づ *Faded Leaves* に謳われた女性が Marguerite であるか，それとも Wightman であるかについて少し触れておくべきであろう。なぜなら Tinker および Lowry 両教授は次の如く記しておられるからである。

> Mrs. Sells follows Professor Hale in regarding all the poems (i. e. *Faded Leaves*) as referring to Marguerite, but the members of the Arnold family have always been confident that these poems, like 'Calais Sands,' were inspired by the poet's passion for Miss Wightman.(13)

すなわち，識者の中にも *Faded Leaves* が Marguerite poems に入るものと見なしている人がいることが明らかである。しかし，上の but 以下の文が示す如くに，この詩はやはり後に Arnold の妻となった Miss Wightman を対象としたものと見るのが妥当と言うべきであろう。このことは次に示す Baum 教授の文によっても証明され得るものと思われる。

> We know now that the 'Faded Leaves' poems were written to Miss Wightman and represent the early stages of his wooing of the "unerreichbare schöne," and there is no point in canvassing the reasons, never plausible though characteristic of much Arnold criticism, why they ever confused with the Marguerite poems.(14)

然し乍ら，"Faded Leaves" を "Switzerland" と同様に Marguerite poems と見なす学者が存在するにはそれだけの理由がないわけではない。何となれば，1852年に公けにされた詩集

Empedocles on Etna, and Other Poems の中には次のものが混合して含まれていたからである。

'The River' (in 1855 'Faded Leaves i')
'Excuse' (in 1869 'Urania')
'Indifference' (in 1869 'Euphrosyne')
'Too Late' (in 1855 'Faded Leaves ii')
'On the Rhine (in 1855 'Faded Leaves iv')
'Longing' (in 1955 'Faded Leaves v')
'The Lake' (in 1853 'Switzerland ii')
'Parting' (in 1853 'Switzerland iv')
'Absence' (in 1853 'Switzerland vi')
'Destiny' (not reprinted by Arnold)
'To Marguerite ['Yes, in the sea'] (in 1853 'Switzerland v')

さて，*Faded Leaves* が現在の順序で一つの series となって構成されたのは1855年のことであるが，ここで一つ我々の注目を惹くのは Tinker 及び Lowry 両氏の記す次の一文である。

> In sharp contrast to the similar series called 'Switzerland,' 'Faded Leaves' was left by the poet as he first constructed it, and the text was unaltered.(15)

すなわち，度々修正を加えられた *Switzerland* とは著しい対照をなして，*Faded Leaves* は彼が最初に構成した通りにされたままで，何ら修正を加えられなかったのである。然し，だからと言って，*Switzerland* が *Faded Leaves* よりも一段と入念に推敲され，慎重な配慮をなされたものであり，それ故に格調においても内容においても優っていることは，必ずしも断定はできないであろう。

ところで，*Faded Leaves* が lyric である以上，その意味内容を研究するに際して，それらの詩篇のもつ情緒的基調がどのようなものであるかを先づ見究める必要がある。このことに関連して Stricker 氏の所論は次の通りである。

> It makes a difference whether their central impulse is one of elegy, of love, or of romantic aspiration. a close analysis of imagery and prosody shows that romantic aspiration accounts for the poems' structure.(16)

つまり，*Faded Leaves* が所謂 Marguerite poems に入るべきものであるならば，elegy 的色彩が濃厚であるとも考えられようが，それらの詩篇が Wightman に寄せるものと考えられるからには，love もしくは romantie aspiration がそれらの central impulse とみなされるべきである。そして，Stricker氏はそれが romantic aspiration であると考えており，本稿の筆者も同氏の所説と感を同じうするものである。19世紀初め数十年間に隆盛を極めた思潮である Romanticism は Arnold が活躍した時代においても決して消滅したわけではなく，依然として英国文

学思潮の中で軽視できない存在であったのであり，詩人としての Arnold は romantic な情緒も持ち合わせていたことは明らかである。浪漫派詩人が渇望して止まなかった，完全にして永遠の人生と美は Arnold の恋愛詩の全ての底流をなしていることは，Stricker 氏の叙述の通りであろう。[17]

さて，*Faded Leaves* の最初の詩篇 *The River* について論述することにしたい。この詩には Marguerite poems である *Switzerland* と一脈相通ずる情緒的内容が盛られていて，とくに Wightman に寄せる詩であることを示す個所は見当らない。しかし，次に示すその第一節は韻律，抑揚において読者の耳に快く響くものであり，且つその長閑で美しい風景描写の巧緻さは詩が作られたときの背景を鮮かに謳い上げている。

Still glides the stream, slow drops the boat
Under the rustling poplar's shade;
Silent the swans beside us float——
None speaks, none heeds; ah, turn thy head![18]

第二節以下の各節には，pathos が満ち，pathetic な情感が漲り，sentimental な手法が読み取られる。相手の女性の情愛深い関心が自分に向けられていない嘆きが鮮かに描き出されていると言い得るであろう。とくに第三節の初めの "My pent-up tears oppress my brain, および My heart is swollen with love unsaid. という2行は切ない情感が溢れており秀れた筆致と言うべきであろう。

次いで第二番目の詩篇 Too Late に論述を進めることにする。この詩は僅か two stanzas から成り，全篇8行に過ぎない短詩中の短詩とも言うべきものである。然し乍ら，その内容においては極めて秀れていて，詩人としての Arnold の真骨頂を示すものである。この詩の中に romantic aspiration が存在することについて Stricker 氏は次の如く述べている。

> In Too Late he states the idea of "halved" souls and then gives the idea dramatic form. The separation here is especially painful because a single being is split apart. A broken soul is a more powerful idea than is the hackneyed metaphor of a broken heart. And when the idea that the parts belong together carries inseparably with it the thought of separation, Aronld achieves a condensed effect that is rather poignant. This intensity is exactly the effect that romantic aspiration requires.[19]

ところで，本稿の筆者はこの詩において，Arnold の運命観，宿命論が端的に表明されているのはその second stanza において著しいものと考える。このことは "And sometimes, by still harder fate, The lovers meet, but meet too late." という二行によく具現されている。「時として相慕い相寄る二人の恋人は出会いこそすれ，その出会いはあまりにも遅きに過ぎるのであるが，それはさらに一段と厳しい運命のなせる業なのである。」と Arnold はうたっている。この第二節において，とりわけ我々の注目を惹くのは，"——They heart is mine! True, true! ah,

true!" という第三行目であろう。この True の三度の繰り返えしは強烈な迫力を以て読者の胸に迫らずにはおかない。正しく，Wordsworth の定評ある名詩 "Break, break, break" に匹敵する表現と評しても過言でないとさえ思われるのである。なお，この詩も Marguerite poems の一つとみなされても差支えない内容のものである。

第三番目の詩篇 *Separation* へと筆を進めよう。Stricker 氏はこの詩と第二番目の詩との関連を，"Too Late attempted to re-create the wound; Separation deals with its healing." と説明している。

この詩の first stanza は次の如くである。

Stop!——not to me, at this bitter departing,
Speak of the sure consolations of time!
Fresh be the wound, still-senew'd be its smarting,
So but thy image endures prime.[21]

Arnold は，「このつらい別離に際して，時が経てば必ず心が慰められるなどと私に言ってくれるな。」と絶叫している。彼は心に受けた痛手，とくに灼熱火と燃ゆるが如き恋の破綻はいつまでも生々しい心の傷となって残るものだとうたっているのである。これは正しく失恋が心に与える打撃，衝撃の強さを巧みな筆致で示した表現と言い得るであろう。ところで，この詩が Marguerite poems に入るものではなく，Wightman poems に含まれるべきものであるという主張を裏付ける文言が，この詩の最終節の末尾の次の二行に見られるのである。

Who, let me say, is this stranger regards me,
With the grey eyes, and the lovely brown hair?

すなわち，明白に Marguerite poems である *Switzerland* の中で，"the sweet eyes of blue" および "the soft, ash colour'd hair" と書かれているのに反し，この詩においては "the grey eyes" および "the lovely brown hair" と表現されている。目と髪の色をそれほどに重視する必要はないというのが，この詩を Marguerite poems の一つである考える人達の意見であろうが，本稿の筆者は，やはり目と髪の色の相違という点を軽視すべきではないと思うのである。なお，Tinker 氏と Lowry 氏は，このほかの理由として，"moreover, in an analysis of the melancholy strain, we must not fail to take account of difficulties in the courtship."[22]と述べておられる。さて，以上の如き次第でこの詩が Wightman poems に入るものとみなすならば，第一並びに第二の詩篇もまた Wightman poems であると考えるのが自然なのではあるまいか。*Faded Leaves* という総括的な標題の中に含まれる一群の詩篇が，あるものは Marguerite poems に入り，他のものは Wightman poems に入るとみなすことには，どうしても無理があると思われる。Arnold の詩人としての基本的性格は哀感，沈思，瞑想，忍耐，克己などである。従って，本来ならば希望，歓喜，憧憬，慕情などを基調とすべき恋愛詩においてすら暗い調子が目立つ結果になったのであろう。よしんば，この詩の書かれた時点において Miss Wightman に対する彼の

求愛が成功しておらずとも，将来における明るい見通し，期待が情熱をこめて謳われた字句が見られないのは読者にとって淋しいことである。明暗の対照が見られてこそ，明るさも暗さも一段ときわ立って浮彫りにされるのであって，暗い面ばかり強調されていることは，恋愛詩としてやはり欠点の一つに数えられねばならないであろう。ともあれ，この詩篇が含まれていることによって，*Faded Leaves* という一群の詩は Wightman poems であることを有力に根拠づけるものであると考える。次に，第四番目の詩 *On the Rhine* の検討に入ることにする。Arnold は the first stanza において，「忘れようとする努力は無駄である。だが，いつかは私の心も冷めるであろうことを私は知っている，私が訪れようとしている聳え立つアルプスの峯に積る永遠の月光に照らされた雪と同じ如くに——しかし，ああ今は未だ冷めてはいない，未だ冷めてはいないのだ！」とうたっている。募り高まった恋慕の情熱が時という妙薬によって一日も早く冷やされることを彼は期待しているのであって，悲哀の籠った魂の絶叫には読者の胸に迫る力強さが含まれている。そして Arnold は，次に示すこの詩において最も注目すべき第二節へと筆を進めている。

Vain is the agony of grief.
'Tis true, indeed, an iron knot
Ties straitly up from mine thy lot,
And were it snapt——thou lov'st me not!
But is despair relief?(23)

上に引用した節について，Stricker 氏は次の如く述べている。

"Is despair relief?" It depends on what kind of despair. Real despair, which gives up the lover's hopes and therefore releases him from desire, is indeed relief. But in stanza ii the speaker refers ony to the fact that he will not possess the girl. He realizes his plight but does not accept it; he does not ask a real question, but cries out rhetorically?(24)

Arnold は詩の中で，「果して絶望は救いなのか。」と自らに問いかけている。この問いに対して我々ならば一体何と答えるであろうか。勿論肯定的に答える者もあろうし，また否定的に答える者もあるであろう。さらに，同一人においても時と場合によって異なるわけである。しかし，問題点はやはり Stricker 氏の言う如く，その despair の種類如何ということになるのである。同氏は，「恋人の希望を放棄し，それ故に彼を欲望から解放するような真の絶望であれば，それは実際に救いである。」と考えている。この点に就いては，本稿の筆者も感を同じゆうするものであり，とくに疑義をさしはさむ余地はないようである。然し乍ら，同氏は，この質問は本当の質問ではなくて，唯だ単に Arnold の修辞的な叫びに過ぎないとみなしている。成程これも一理ある見解ではあるが，筆者は必ずしも同氏の意見に同調するものではない。ここはやはり Arnold が自己の心の奥底へ向って問いかけた疑問の言葉と考えるべきだと思われる。なお，この詩篇の

the fourth stanza における目の色の描写には，詩人らしい鋭敏にして繊細な観察が余すところなく生かされている。それは先づ Those eyes of deep, soft, lucent hue に見られるが，とりわけ Eyes too expressive to be blue および too lovely to be grey という叙述において，他に類を見ない巧みな筆致が読者の注目を惹いている。まさに，汲めども尽きぬ含蓄豊かな表現と言うべきであろう。

さて，*Faded Leaves* の最後の詩篇 *Longing* へと目を移すことにしよう。この詩は各四行づつの four stanzas から成り立っているが，the first stanza と the last and fourth stanza とが一字一句全く同じであることが，先づとくに読者の注目を惹くのである。今その内容を次に紹介する。

Come to me in my dreams, and then
By day I shall be well again!
For then the night will more than pay
The hopeless longing of the day.[25]

恋人の心を射止めることを諦めた詩人は，せめて夜半夢の中へなりとも現われてくれと，恋人に呼びかけている。たとえ夢の中にせよ，逢瀬を楽しむことによって，昼間のやるせなく，儚いあこがれの思いの償いをしたいという，詩人の絶叫には，人々の胸中に深い感動を喚起せずにおかない魂から迸り出た迫力が秘められている。この節全体に恋人に寄せる綿々たる憧憬の念が横溢しており，寝ても醒めても行住坐臥片時も脳裡を去らぬ思慕の情感が行間の随所に滲み出ているのである。就中，僅かに四つの節から成る詩篇の冒頭と掉尾にこの節を配置したことは，如何に彼がこの節の内容を重視していたかを，我々に痛感させる。そしてこの節の繰り返えしは，読者の心に言いしれぬ強い感銘を与えるものである。この *Faded Leaves*の最後を飾る詩篇は，とくに Arnold の詩作の技法の巧緻さをまざまざと見せていると評しても過言ではないであろう。なお，第四及び第五の詩篇については，それらが Wightman poems ではなくて，Marguerite poems であると考えることも可能であり，あるいはむしろ Marguerite poems に入れる方が適当とさえ思われる表現が含まれている。なぜならば，Miss Wightman との恋は後になって目出度く実を結んだほどなのであるから，Arnold が彼女との恋愛の途中において，これらの詩に描写されている程度にまで絶望感に苦しめられたとは思えないからである。しかし，第三の詩篇が Wightman poems の一つと見なすことが妥当である以上，第四，第五の詩篇が，Marguerite poems であるとすることは何としても無理が伴うようである。従って，第四，第五の詩篇の絶望的な情緒の表現は，詩人の常套手段である過大誇張によるものと考えるべきであり，それらの詩はやはり Wightman poems に含まれると考えるべきであろう。上述の如き理由によって，*Faded Leaves* という一群の詩は何れも Wightman poems であると思われる。

ところで，以上論述した内容を盛った五つの詩篇から構成されるこの group に対して，Arnold は *Faded Leaves* という見出しをつけているのであるが，筆者はこの命名には必ずしも簡単に

首肯することはできない。若しも，これらの詩篇が Marguerite poems であるのならば，*Faded Leaves* という標題はその内容に照らしてふさわしいものと言い得るであろう。然し乍ら，これらが Wightman poems と考えられる以上，*Faded Leaves* なる標題はこれらの詩群の実態にややそぐわぬという感じを否定できない。その標題の選択にはさらにもう一工夫あって然るべきであったと思われるのである。なぜならば，Miss Wightman とは結局縁あって相結ばれて二人は無事添い遂げることが出来たくらいであるから，二人の恋は少くとも絶望的であったとは考えられぬのであって，*Faded Leaves* というが如きあまりにも暗い，絶望感に満ちた表現は必ずしも当を得たものとは思われないからである。

終りに，本稿を結ぶに際して，Love Poems としての *Faded Leaves* の短所，欠点と言うべきものを指摘しておくことにする。この group に含まれた五つの詩篇は何れも抒情詩であり，抒情詩として秀れた点を認めるのに吝かではない。とくにその随所に，emotion, exclamation, grief, pathos,distress などがあって，抒情詩としての内容は彼の数多い詩の中でも出色のものに入れて然るべきであろう。だが然し，恋愛詩としての評価となれば，それに不備な点があることを否定できない。すなわち，これらの詩篇には，恋する女性の容姿，挙動，性格などに関する叙述が極めて乏しいのである。このことは彼の Marguerite poems の一群を構成している *Switzerland* に就いても言い得るのであるが，*Switzerland* の方がまだしもそれらに関する描写が多い。すなわち，*Switzerland* には，that graceful figure fair; That cheek of languid hue; soft, enkerchief'd hair; those eyes of blue; The sweet blue eyes; the soft, ash-colour'd hair;/The cheeks that still their gentle paleness wear; the lovely lips; their arch smile that tells The unconquer'd joy in which her spirit dwells〔注:their は her lips の代名詞〕; Thy cheek's soft hue など，主として容貌に関するものではあるが，相手の女性の image を読者に思い浮ばせる描写が少しは見られる。これに反して，*Faded Leaves* においては，those arch eyes; That mocking mouth; that lovely hand; the grey eyes and the lovely brown hair; Those eyes of deep, soft, lucent hue など若干の叙述が散見されるに過ぎず，*Switzerland* の場合よりも量的にも質的にも見劣りがしている。*Switzerland* 自体が相手の女性の描写が不十分と思われるのであるから，*Faded Leaves* の場合は更に一段と不十分と言わねばならない。次に指摘される欠点は，Love Poems でありながら，余りにも暗さに偏った内容が盛られていることである。人の死を弔う挽歌ならともかくとして，苟しくも恋愛詩であり，而も後になって添い遂げることが出来た女性に対する慕情を謳った詩なのであるが故に，今少し明暗の対照が綾をなすように筆を進めた方が読者に与える感動が大きかったのではあるまいか。*Faded Leaves* を味読すれば，炎となって燃える恋慕の思いが詩人の胸を焦かしている様子や，絶望，落胆に苦悩する詩人の失恋による心の傷手は十分に汲みとることができる。しかしこれらの暗い面は，何らかの方法による明るい面の挿入によって，一層鮮かに浮彫りにされ得たと考えられるのである。その他の欠点としては，*Switzerland* のそれと同じものであって，恋愛詩であるにも拘わらず，

Faded Leaves のどこにも，文字通り所謂「花も嵐も踏み越えて」ただ只管に万難を排してでも燃え上る恋心を実らせようとする主人公の烈々たる気魄が欠けていることが挙げられる。*Switzrland* においては，相手の女性である Marguerite の氏，素姓，身分などが必ずしも Arnold の生涯の伴侶としてふさわしいものではないという懸念が常に彼の念頭を去らなかったことが，彼の恋を断念させる要因の一つであったと思われる。すなわち，世の毀誉褒貶を意に介する性格の持主である Arnold としては，飽くまで彼女との恋に執着し得ない明白な原因があったわけである。けれども，*Faded Leaves* に謳われた女性である Miss Wightman に関しては，そのような顧慮をする必要は無用であった筈である。従って，*Faded Leaves* においては，あらゆる障害，難関を撃破し克服して，純愛一筋に目的に向って邁進する勇気と精力とが詩篇に示されているべきである。苟しくも恋愛に関する限り，Arnold が身につけていた忍従と諦観といった如き美徳は，彼にとってマイナスの働きをする要因となったことは否定できない事実である。彼がこのような美質を具えていて，女性との交際においてもそれに固執したことが，彼の恋愛において，自由濶達に，そして奔放不羈に行動することを妨げたのである。結局，そのことが彼の恋愛詩の限界を画したと言うことができるであろう。換言すれば，想い焦がれた最愛の女性を失ったという痛恨の念，断腸の思いなどを描写する技法において，Arnold の手腕は卓抜したものと評することできるのであるが，飽くまでも初一念を貫いて，恋する乙女の愛情を獲得しようとする情熱の表とが現において欠くるものがあったと思われる。

Bibliography

(1) 文学序説（土居光知著）p. 321 ll. 8—9 岩波書店版
(2) 同上 p. 322 ll. 9—13
(3) イギリス文学史（斎藤勇著）p. 440 l. 22—p. 421 l. 6 p. 421 l. 25—p. 422 l. 4 研究社版
(4) 基督教的文学観（石田憲次著）p. 267 ll. 2—7 研究社版
(5) 近英文芸批評史（矢野峰人著）p. 37 ll. 7—9 全国書房版
(6) *ibid.* p. 38 ll. 9—10
(7) *ibid.* p. 63 ll. 14—15
(8) *ibid.* p. 67 ll. 2—4
(9) *ibid.* p. 70 l. 16—p. 71 l. 3
(10) アーノルド論攷（矢野峰人著）p. 16 l. 10—p. 17 l. 6 全国書房版
(11) *Romantic Aspiration in the Poetry of Matthew Arnold* (Margery W. Stricker) p. 1 ll. 8—12 University Microfilms 版
(12) *ibid.* p. 27 ll. 14—19
(13) *The Poetry of Matthew Arnold* (Tinker and Lowry) p. 168 ll. 10—14 Oxford University Press 版
(14) *Ten Studies in the Poetry of Matthew Arnold* (Paull F. Baum) p. 83 ll. 32—37 Duke University Press 版

(15) *The Poetry of Matthew Arnold* p. 168 ll. 6—8

(16) *Romantic Aspiration in the Poetry of Matthew Arnold* (Margery W. Stricker) p. 28 ll. 7—11

(17) *ibid.* p. 29 l. 15—p. 30 l. 2

(18) *Poetical Works of Matthew Arnold* (Tinker and Lowry) p. 206 ll. 1—4 Oxford University Press 版

(19) *Romantic aspiration in the Poetry of Matthew Arnold* p. 66 ll. 18—25

(20) *ibid.* p. 67 ll. 19—21

(21) *The Poetical Works of Matthew Arnold* p. 207 ll. 7—9

(22) *The Poetry of Matthew Arnold* p. 168 ll. 22—24

(23) *The Poetical Works of Matthew Arnold* p. 208 ll.1—5

(24) *Romantic Aspiration in the Poetry of Matthew Arnold* (Margery W. Stricker) p.68 ll. 9—14

(25) *The Poetical Works of Matthew Arnold* p. 208 ll. 23—26